

十二月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

もう一度

狩野 一 男 東 京

山吹が咲イテイルヨと5メートル前行く妻にメール送りき
我が歩みはやくも鈍^{のろ}くなりけり病後に老後が打ち重なつて
考へ中、デフォルト・モード・ネットワークなる神経ネットワークについて
裏切りほど、人間らしい行為もない。ミラン・クンデラ氏の言葉にて
よかつたらよろしかつたらもう一度、始める前のはじめに戻り

平和の猿

木 畑 紀 子 京 都

ポストまで漕ぐ自転車にアキアカネしばし並走してくれにけり
あさがほと共にめざめてあさがほの萎るる十時にねむたくなりぬ
ふいに湧く歌詞のきれはし検査をすれば出で来ぬ「みんな夢の中」
新聞は斜め読みテレビは聞き流し此の世の悲苦にからうじて耐ふ
エチオピア高地の崖に身をよせてねむる平和の猿ゲラダヒビ

見よとばかりに

福 士 り か 青 森

何百もの魚が水を跳ねること亀甲堀を驟雨打ち付く

夏掛けのふとん仕舞はむ朝晩の風に炭の香あればもう秋

縁側で日向ぼつこをする猫の毛並みは秋の稲田のそよぎ

朝焼けのくれなる増せる午前五時見よとばかりに猫が跳び来る

「平川マダムひとつください」ネーミング勝負のいちごかき氷へ△

東京の人

小田部 雅 子 静 岡

人ありて人なきごとく人を縫ひ上手にあるく東京の人

立ち止まりまた立ち止まりやりすごし人混みをゆく田舎のねずみ

代々木公園駅出でしとき夕風にあるかなきかの秋の微粒子

床屋あり総菜屋あり東京の夕べゆたかな路地がまだある

夕映えの秋のビル群すれすれに頭上をすべる飛行機の腹

☆

☆



水島 晴子 兵庫

奥村 晃 作* 東京

しやうもないわたしを前にみづからの弱みも見せてセラピストをり
ほちぼちと爪切る音がしばらくを仕切りの布のむかうにつづく
ヒジャーブの黒きをまとふひとりあり入浴介助の輪にてはたらく
おとろへし海馬やしなふだれかれに暑き九月の雨降りやまず
黄の白の折り目切れ目に愛が見ゆ魔除けと賜びし手づくりの花

武田 弘之 神奈川

不思議なり「現代短歌大事典」のどの頁にも布施杜生なし
君の遺著「リアリズム短歌論」よろし就中「布施杜生小論」
歎めく石群がれり相模なる国分寺跡東の方に
この古き寺に集ひて真剣に歌詠みし「コスモス」の人ら今亡し
寺裏の御堂寂けく十一面千手観音立像を秘む

高野 公彦 千葉

水槽に潜む目高ら餌を撒けば流星のごと素早く寄り来
秋といへばのどかに浮かびくる案山子いつぼん足で田を守る神
父の字で「長浜の石」と書かれある形見の小石引出しに秘む
六十分メトロに乗りて吉祥寺の冷ナスうまき「千尋」にて飲む
居酒屋の焼鳥の香と酒の香と女声男声の中でいのち酔ふ

市街地を流るる川の最上川兩岸人工の壁に護られ

茂吉が坐り歌を詠みたる水際には行けず橋から見下ろせるのみ
最上川詠みし不朽の作いくつ就中「逆白波」「虹の断片」

「虹の断片」の歌古閑裕而が作曲し大石田の町の人等歌うと
芭蕉、茂吉永遠にし残るうたびとの足跡を見に大石田に行こう

森重 香代子 山口

雷鳥の子の縫ひぐるみ荷に秘めて北の旅より娘の帰り来つ
段丘をさいなむごとく翳りゆく没日のなかに身を置きてをり
すでに夫は世にをらねども夜々に観ていまでもわれは阪神轟
ステッキがはりに夫が扱ひをりし傘もう幾年も傘立にあり
またいつの日か、末尾の文のもの哀しそんな日はもう残されてゐず

日影 康子 富山

山門の屋根をおほひて繁りたる百日紅の大樹枯れて伐らるる
早朝の庭の草除り一時間と決めて猛暑の二ヶ月励みぬ
群雲に隠れて昨夜は見えざりしスーパーブルームーンと明け方出会ふ
眼を病みて読むを控ふる口惜しさや角田文衛の「平安の春」など
猛暑日をクーラーの近くにも書きて厚手のソックス脱いだり履いたり

影山 一男 千葉

友達でないがプーチン聞いてくれロシアおそろしおそろしロシア
蟬声が呪詛のごとくにひびく午後台風二つ近づき来たり
処理水と名付けられたるかの水がまぎれゆく海われらを産みま
山手線を動かすための原発と言ひし越後の人誰だつけ

桑原 正紀 東京

ひたひたと沈みゆく日を見てをればふとも天動説にかたむく
どの言語も日が(昇る)また(沈む)と言ふ言葉は天動説を背負ひて
地が動くか天が動くかそんなことどつちでもええやんとカラスがわらふ
地球といふ奇跡の星を嘉すべしいくさなど愚の骨頂にして
人類の滅びたるのち 太陽が燃え尽きるまで五十億年

宮里 信輝 神奈川

トンネルの多き林道を二〇分ほどのドライブで着く鳥居原
四〇〇台ほど駐められる広大な鳥居原駐車場無料なり
大いなる宮ヶ瀬湖の西の果てにある「鳥居原庭園」散策によし
両側にそびえる二本の大いなるモミの木二本に迎へられ入る
片側に宮ヶ瀬湖ある高台の「鳥居原庭園」わが散策場

小島 ゆかり 東京

晩夏光シャツを照らせり少年の白、老年の白となるまで
すでに秋行き止まりなるこの道をもどらんとして風に囲まる
ミステリーの闇が深まりこの夜が深まりそして もう眠らなきや
虫の音の天にもひびく夜深しあしたは朝の飛行機に乗る
死のほかに行きつくところある、とし九月の青いセーターを着る

鳥田 暉 神奈川

朝咲きて夕べにしほむ朝顔のはかなき夢を花にささげて
死は生に抗ひがたく来るゆゑに生きゆく吾は一瞬の燦
カタカナのやうな雨降る秋の朝白百合の花藪に咲き出る
古本屋の古き亡霊うろつける秋の夜ふけの重き暗闇
太鼓打つ音のかすかに流れきて月夜の路をゆつくり歩む

大松 達知* 東京

うるわしのトイレのドアに(あき)とあり妻の名前の一部だこれは
正解はあきらめることあきらめてさびしくなるを受け入れること
ためらわず機嫌の悪くなる人をうらやみながらかなしみにけり
釈迦像の頭に甘茶かけたこと、そんなかんじでジャックダニエル
自習のときがいちばん伸びるそう言つてきょうも授業を聞かせいるなり

田宮 朋子 新潟

白^{くさのつゆしろし}露といへど猛暑まだつづく山みち萩の花咲く
新たなる気象用語がまたも増ゆ(フラッシュ千魃(フラッシュ洪水
図書館の棚の『新潟藻塩草』ひらけば父のエッセイが載る
ひとりゐの夜のすさびにびいどろのほつべんぼびんばびんと鳴らす
雲の尾を曳かざるままに碧空を銀針がゆく秋の真夏日

津金 規雄 神奈川

文月早も碧きどんぐり実らせていのち重たく椎はしづまる
意識下に沈めたはずの想念がぶかり浮きくる澱をまとひて
空の青さ腰に帯びたる銀やんま岸へ飛び来て即反転す
ためらはず王妃のごとく踏み出せば夏草はなびく道を示して
庭の石に揺れゐる影のくきやかさ幾何学模様様の百合の葉と知る

小山 富紀子 京都

目と鼻の先へ行くにも猛暑にて家から見えるポストが遠し
袷着て酷暑の京をめぐりゆく観光客にだれか教へよ

振袖は娘の第一礼装と誰か教へよ立ち喰ひの娘に

傘かしげ片陰ゆづりゆくひととすれちがふとき佳き香ただよふ

攻防戦と聞こえテレビに目をやれば駒を打つ手がしづかに映る

清水 正子 神奈川

待ち合せする本屋まで急ぐわれ夢なれば何と崖よちりぬき

起床後も夢を覚えてゐるは稀、大会参加けふこそ決めむ

長虫のやうなあの雲はコントレイル西へ飛びゆきし機を見ざりしが

この空のどこかに雲の出入口あるらし日蔭しても見えねど

行つてきます、ただいまなどと出入りする雲のファミリーおもひて眠る

後藤 美子 北海道

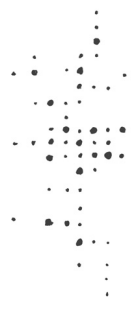
スケッチのごとくなりゆくわが歌が心ふるへることの減りたり

予想気温名古屋より札幌が高きけふ移り行きたる友をし思ふ

日が落ちて暑さいくぶんをさまるを喜びあひつつ夕餉にむかふ

各地よりスーパームーンの像とどき見上げぬ雲厚き札幌の空

アポカドの大き種割れ緑の葉ゆらりひろがる水やりたのし



藤野 早苗 福岡

自分にししか見えないおともだちのため味噌汁に卵落しゐる母
九十年使へば経年劣化するその当然を肯はんとす

枕辺に父立たしめてたらちねの大腦皮質のレビー小体

山折と谷折 要は直線で折りたる紙のそのうらおもて

かあさんを連れていくよと仏壇の父に告げれば蠟涙こぼる

風間 博夫 千葉

水平線、海面と空が接したる線、砂浜に立ちてながめる

水平線、鉛直線に垂直な直線いたるところにのびる

糸瓜水、根が吸ふ水を茎切つてぼたりぼたりと集めたる水

糸瓜水、子規が所望の糸瓜水痰を切るのに効くといふ水

ちさき石水子の墓と母言ひきはかなき石に水をかけやる

田中 愛子 埼玉

そば殻のまくら寂しゑ生まれ家のひろき座敷にひと夜寝ねたり

あふ向けに寝れば思ほゆ寂しかつたであらう一人の終の日の夜

とりかへしつかぬあれこれ押しつぶす横向きになりうつ伏せになり

はだしにて逃げだすこともわれになく穏やかだつたのだらう今まで

祝ふことも祝つてもらふこともなくカレー食べをり敬老の日を

橘 芳園 新潟

若き日に着てみたかりし皮ジャンをひさびさに帰る子は着てゐたり

失せものをさがすにつひに見つからぬままの夢見てまた目覚めたり

悩んでもよきは悩まず思はでもよきは思はずこの先ゆかむ

自己嫌悪しきり湧く日は三方歩歩き回りに自分をほめる

つばくらめこころの中をかけりゆけわれのこころのうつの晴れまを



水上 芙季 神奈川

あんぱんの桜の花の塩漬けだ産後の臍を一人のぞけば
もうマスクしてないなげやのをばさんと赤児を抱いたわれ笑ひ合ふ
鼻かんでかんでかんだらまたかんで独立してゆく鼻を包みぬ
おもちゃ箱にキリンとヒツジが加入して一番柔和な顔のライオン
突き進むたびに砂金のやうなもの身から落としてこの夏にある

大野 英子 福岡

雨が降ればうたが降りくるわたくしと大地に少しの恵みとなりて
日の当たるビル壁の鳶の影くる見惚れあることもいちどくるり
行き合ひの空がひろがり見下ろしてあるさやうならさやうなら夏
さらさらしきひかり生みつ鱧の群れ歓喜ふりまくはつあきの川
白かりし羽根実黄色くゆれてをり常緑樹シマトネリコに秋

松尾 祥子 東京

八月の画面に映る戦争の残像のなかのわが誕生日
月光は木管楽器の音色して窓の隙よりわれを包みぬ
五歳児にゼリーを貰ひかぶと虫のへかぶぶんちゃん(夏を越えたり
敬老の日の保育園トトトンと小さき拳に肩叩かるる
律くんのばあばはわたし真つすぐに駈けるをさなきゆつと抱き締む

鈴木 千登世 山口

〈天青〉と志村ふくみが名付けたる臭木の瑠璃の実が零す青
草の根で染むる糸もて布を織る古代の女もわれも目見伏せ
経を(たて)緯を(よこ)と読む機織りの糸しんと生み出す宇宙
箴と杼の連ひもおぼろ秋の夜のまぼろしに聞く きり、はたり、ちやう
瓜子姫、織り姫、おつう 機を織る女の話はどれも哀しく

水上 比呂美 東京

くすの木の並木通りのポストより旅立たせたりうすあをの魚
かはなみの並木通りのくすの葉は魚群となりて照り翳りをり
浮宝は船を讀へる言葉なり櫂樟の船なつぞらに浮く

くすの木は琴となりたるくすの木の脳波を受けて木の葉ふるはず
夏の夜の並木通りの赤ポストはくすの木語る叙事詩を聞けり

鈴木 竹志 愛知

急坂を登れば社殿あるといふ神倉神社に無謀にも参る
外つ国の人は優しくわが妻に杖を差し出す急坂の途次
次々と外つ国人の降りきたり神倉神社急階段を
やうやくに登り着きたる御社は巨岩祀れる神倉神社
登るより下るはつらし疎む足叱咤すれども言ふこときかぬ

原賀 瓊子 東京

夜干しする綿ストールの布目より街のあかりがてんと見ゆ
八分の一の白菜売られあり一人居われの水炊きのため
漱石を読みさしたまま「セロ弾きのゴーシュ」をひらくわれのサーカス
蟬たちのむくる少なし沸騰のなつをすごした晩夏の林
令和五年の十五夜待たる天上の月とわたしと忌日の夫と

小島なお* 東京

斉藤梢 宮城

37歳25000個 点けて消す豆電球の今、今ひかる
妊孕性 電飾が木を灯すのに似て寒ければまぶしさを見す
偶像を容れて心は箱になる渋谷ハチ公触れば秋で
推理研の四人がマリアを救う旅 検査結果を待つ一時間
ところで、と振り向く江神先輩も染色体は46本

夏けやき身を引き締めて立ちてをりこの沈黙の黒は怖ろし
この夏のかなしみは夏に置いてゆかうアキアカネ飛ぶ秋が来るから
少し先の未来が見えてゐるやうで橋わたりつつ心明るし
聞こえない吾に車の窓あけて虫の音さかすこの夜の夫
約束は守られないまま亡き友がわれに残した約束なつかし

詩歌句レッスン ● 小島ゆかり

可能性秘めた若き歌人

《新聞転載》

短歌ブームとも言われる昨今ですが、それはネット世代の一時的な流行りなのではないか、自分たちとは関わりのないことではないか、そう思われる方も多いかもしれません。しかし、大きな可能性をもった若い歌人の作品を読んでみてください。昨年刊行された第一歌集を2冊、ご紹介します。

「用意」から「ドン」のあひだの永遠を
生まれなかつたいのちがはしる

千葉優作「あるはなく」
鯖缶のぶつ切りの鯖 この鯖の身体が別の鯖缶にもある

タイトルは、「新古今和歌集」の一首から。随所に古典和歌を引用しながら、1冊

を構成しています。口語文語を自在に使い分けつつ、旧仮名表記を選んでいるところにも、この作者の特徴があります。

1首目は、あの不思議な空白を「永遠」と捉えて、いろいろな事情でこの世に生まれなかつた命への痛みを表現しています。

2首目は、リアルすぎて気づかなかつたことを言われて、ぎよつとさせられます。独創的な発想をシンプルに表現できる30代の歌人です。

八月の空に言葉のあお満ちて（戦争は白黒ではない）と気づく

鈴木加成太「うすがみの銀河」
けふよりあすへ疲労はほそき橋として架

かる その橋を渡りはじめつ

高校生のころから投稿作品が注目され、角川短歌賞も受賞した実力歌人です。歌集の途中で、新仮名表記から旧仮名表記へと転向し、多くの作品が端正な文語文体で表現されているところも注目に値します。

1首目は、17歳のときの歌。映像や書物でしか知らない戦争は、モノクロ。しかしあるとき気づいたので。悲惨な歴史が刻まれた日本の8月は、青葉の季節であつたことに。

2首目は、繊細なだけではない、孤独な実感を絶妙な比喩で表現して心に残ります。近代詩をはじめ、詩歌の優れた遺産をゆたかに受け継ぎながら、みずからの表現を模索する20代の歌人です。